天守台

第３０号
発行
小松同窓会本部
〒923－8646
小松市丸内町二ノ丸15
石川県立小松高等学校内
同窓会報編集委員会
TEL･FAX (0761)21-6330
印刷　マルト印刷工業株式会社

絆（きずな）

小松同窓会会長
吉田　歳嗣（高校９回）

小松同窓会会員の皆さまにおかれましては益々のご健勝、ご活躍のこととお喜び申し上げます。又、日頃から母校並びに同窓会に対しまして温かいご支援、ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

さて、平成十二年度から始まりました小松高校の全面改築工事も、本年十月末までには最後の生活学習センターが完成予定です。あとは周辺の建物や校庭の樹木等を整備し、来年の三月までには全ての工事が完了予定であります。

そこで、同窓会と致しましては、来年に新校舎落成記念として数々の事業を推進するための募金活動を行うことを、昨年の総会で決定し、皆様方にはすでに「募金趣意書」をお送りさせていただきました。こんなご時世ではございますが、何とぞ趣旨にご賛同下さり、是非ともご協力賜りたくお願い申し上げます。

実は、今夏で私ども同窓会役員は二期目の任期が切れることになるのですが、ご承知の如く募金活動も始まりましたので、この間は「辞める訳には行くまい」と、先日の常任理事会で全員留任ということで、ご了解をいただいたばかりです。かくなる上は、私どももさらに母校を媒体としての一期一会を大切に、お互いに連帯と信頼の絆を深める努力をしていきたいと思っております。

同窓生の皆さんに学校を知ってもらい、若き日のノスタルジアを感じて欲しいという思いから、毎年九月の最終日曜日にホームスクールカミングディを開催して参りました。懐かしい階段教室でかっての恩師から講義を受け、一献かたむけながら、天守台で青春を謳歌する素敵な催しです。ぜひ一度足を運んで見て下さい、今年でもう五回目を迎えます。

この同窓会誌「天守台」も今号が三十号目になります。平成三年一月に「小松同窓会会報」の名称で初めて発行され、第八号から「天守台」に改称されたのですが、以来十五年学校と同窓会とを結ぶ情報誌として、これからも楽しい話題を提供していきたいと思っております。どうぞ、皆様方のご支援、ご協力をお願いいたします。

（能美市）

関西小松同窓会開催さる

平成十七年三月十二日、第八回関西小松同窓会は大阪全日空ホテルで、約二百五十人が出席して開催され、旧交を温めあった。

総会では、高校二十五回の谷口文彦、真原多佳子氏の司会で始まり、会長挨拶を副会長の関戸治氏が代読、来賓紹介の後、会計報告会則改定等がなされ、新役員も選出された。

懇親会は高校二十五回の立野誠さんと毎日放送の西村麻子アナが務め、懇親会は清水英俊副会長の挨拶で始まり、栖川成人校長が祝辞を述べ、吉田歳嗣同窓会長の発声で乾杯した。宴席には小松の地酒や銘菓が用意され、ビンゴゲームで盛り上がり、旧制中学、県女、高校の校歌を合唱、熊田満也副会長の閉会挨拶で締めくくった。

同窓生を尋ねて

第2回

小松市長
西村　徹
(高校10回)

―この度は3期目のご当選おめでとうございます。いよいよ、西村市政の総仕上げの時期と思いますが、改めてその思いと心意気をお伺いいたします。

市長　多くの市民の皆さんから大変なご支援をいただき、心から厚くお礼を申し上げたい。実に激しい戦いだっただけに、万感胸に迫る思いがあって、それだけに初心忘れることなく、「小松、新時代」の実現に向かって市民の皆さんと共に誠心誠意、頑張ってまいりたいと思っております。

振り返ってみますと、1期目は、市政に対する市民の信頼を回復することに全力を傾けてまいりましたし、2期目は、培われた信頼の土壌に種を播き、ようやく花を咲かせることができたのではないか。そういう意味で言えば、今任期は、実を結ぶ時でありますが、ご存知のとおり、全国の自治体は、人口減少社会を直前に控え、国・地方を問わず厳しい財政状況や環境問題、市町村合併、地方分権といった大きな課題を前に、確かな解を見出せない時代に直面しております。小松市ももちろん例外ではなくて、今しっかりとした対策を講じておかなければ、次代を担う子や孫たちに大きな負の負担を背負わせることになってしまいます。

就任以来、重点的に企業誘致を進めてきましたが、日野車体工業(現ジェイバス)をはじめ、多くの企業が小松に進出し、雇用の創出や定住人口の増加と相まって、税収効果も徐々に現れてきており、今後も、新たな工業団地の造成を視野に入れながら、トップセールスで更なる企業誘致に取り組んでまいりたいと思っています。

小松駅周辺ですが、鉄道高架化、駅西・駅東の区画整理事業いわゆる3点セット事業が完了し、同規模の都市と比較しても圧倒的なくらい可能性を内に秘めたエリアとなっています。この潜在力を最大限に活かしていかなければ未来は開かない。㈱コマツの小松工場周辺の地権者の方ともしっかりと連携しながら、新たな賑わいを創り出す交流人口の拡大を目指していくことが今後の大命題です。

子育て支援の方は、「子育て支援ナンバーワン都市」を目指して就学児童への医療費助成制度の拡大やマイ保育園、学童保育施設の整備を進め、教育の分野でも、お年寄りの方々に地域に伝わる伝承や伝統、文化を教えていただく「お寺子ども教室」を開設することにいたしました。また、改築の時期を迎えている小中学校の校舎ですが、地域活動の核施設となるように、地元の皆さんと意見を交わしながら計画的に整備を進めてまいります。

選挙戦の争点の一つが、平成の大合併でした。県内の自治体も41市町村から19市町へと枠組みが変更され、国の誘導的な側面もあって、小松市民の関心も低かったようです。しかしながら、近い将来の合併機運の盛り上がりに備えて、歴史や文化、教育、都市基盤といった広域的な都市圏の形成に向かって、世論の形成に意を尽くしていきたいと思っています。

―高校時代の思い出と言えば

市長　私の高校時代ですが、今から50年ほども前の話ですね（笑い）。日本は、まだ戦後を引きずって発展途上にあった頃です。暮し向きは今と違って物の乏しい時代でしたが、人と人とのつながり一つとってみても本当にのどかというか、修学旅行も男女別々に行っていました。質素で平和な時代で、加賀八幡から電車で通学していましたが、今と違って沿線には住宅もなく、延々田んぼが連なり、車なんてほとんど走っていませんでした。私の高校時代、今でも残念に思うことは、クラブ活動ができなかったことです。家は農家で、長男の私は手伝いの毎日で、これはどこでも当たり前のことでした。当時農家の仕事は、

2年生修学旅行
男子生徒のみ(前列、左から4番目)

3年5組　清水藤九郎先生
(前列、左端)

ほとんどが人力。そのお陰で、今でも体力では若い人に負けないくらい自信がありますよ（笑い）。

高校時代の得難い財産は、何と言っても「友だちの存在」で、同期の皆さんとは、今でも親しくお付き合いさせていただいております。あの年代だからこそ得られたことだし、生涯の友だからこそ、今後も大切にしていきたいですね。

―高校10回生もなかなか活発なようですが、同期生との交流にも時間を割いておられますか？同窓会にも参加されていますか？

市長　今もお話しましたとおり、高校時代の一番の財産は、生涯にわたる友人を得たことです。機会あるごとに会っていますし、公職にある私としては、本当に貴重な意見を聞くことができます。また応援団として大いに元気と勇気をもらっています。同窓会は、4年に1回程度、学年全体で開催し、クラスの同窓会の方は毎年会合が持たれていて、ほとんど毎回出席していますね。そのほか、松校時代の同級生で組織されたNPO法人の「かがやき21」の会にも参加させてもらって、木場潟の清掃とか福祉施設の慰問、外国の皆さんを対象にした料理教室の開催など、様々なボランティア活動で生きがいを感じる時間をいただいております。

―公務多忙で大変でしょうが、そんな中で健康維持のために特に気を付けておられることとか、趣味、気晴らしは？

市長　市内のトレーニングジムで汗を流すことが多いですね。県庁時代は、頻繁に通っていたのに、市長になってからは月1回程度がやっと（笑い）。妻の助言をできるだけ守って、健康の維持に細心の注意を払っています。それと、年に2、3回程度は妻と一緒に近くの山に登ったり、時間の許す限り木場潟あたりを散策したりして、リフレッシュな時間を楽しんでいます。

かがやき21の会
「グリーンビーチいしかわ」にて（6/5）
（安宅ビューテラス前）

―小松駅もそして駅前も新しく変身しました。母校小松高校もやがて改築工事が完成します。ある意味では小松の再出発の時期といえるかもしれません。県外に住む同窓生たちも定年を迎え、老後の生活を「田舎暮らし」を願望されている方も多いと聞いております。同窓会としても協力していきたいと思っていますが、行政としても協力いただけますか？老後のユートピアを売り物にしませんか？Uターンの推奨です。どう思われますか？

市長　市の庁舎から、母校の校舎が日々変わっていくのを目にすることができますね。平成18年の完成を、わくわくする思いで待っています。同窓会でも、完成記念事業に向けて募金活動が始まったようですが、一人でも多くの方々にご協力いただけると有難いですね。

小松の再出発というか、都市の再生というのか、これも選挙戦の熱いテーマでしたね。団塊の世代の大量退職による「2010年問題」なども話題になっていますが、その方々が退職後、地域活動の担い手として活躍していただくことによって、地域コミュニティーの活性化が期待できるのではないでしょうか。私の世代も、また若い世代の方もそうですが、松校の同窓生の多くは関東・関西・中京エリアなどで、第一線に立って活躍しています。リタイアしたとき、昔からの友人がたくさんいるふるさとの小松に戻ってくるという考えをお持ちいただけるのであれば、当地の市長として非常に嬉しい話ですし、Uターンしたいという魅力あるまちにしていかなくてはならないと改めて思います。街なか定住対策への施策など、精一杯お手伝いさせていただきます。

また、老後のユートピアというだけでなく、子育て世代の人たちもUターンしやすい環境づくりとして、教育や子育て支援、企業誘致などには最大限力を注いでいく必要があります。

特に企業誘致は、何といっても人とのつながりが大事でございますので、同窓会のネットワークを可能な限り活用させていただこうと思っております。先ほども申し上げましたが、私自身が率先して企業にお伺いして成約を取り付ける覚悟でいます。何かヒントや情報などございましたら、ぜひお知らせいただければと思っています。

―最後に同窓生や在校生に一言お願いします。

市長　今から思うと、青春のまっただ中にある高校生時代のこの時期は「自分という存在に目覚め、自己を自覚し、将来の自分の基礎をつくる時期」、いわゆる人間形成の大事な時期にあたると思います。在校生の皆さんには、勉学はもちろんですが、部活動もそう、色々な本を読んで物事の本質を捉える力を養うこと、自分の意見をはっきりと言える人になって欲しいと願います。また、この時期は生涯にわたる友ができる時期でもあります。たくさんの友人を心の糧とし、水魚の交わりのごとく真の友をつくって欲しい。卒業生の皆さんには、今日まで、公私にわたって大変なお世話になっております。このご恩に報いて、小松市民の皆さんの福祉向上と小松の都市再生に向かって、誠心誠意、市勢の発展と振興に努めてまいりたいと思っております。今後ともどうか変わらぬご指導とご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

（小松市）

小松高校記念館を訪ねて

黒本　儀治（中学46回）

今年の三月の初旬、小松中学の一年先輩である安田進一郎さんから、小松同窓会報「天守台」の編集委員を引き受けてくれないかとのご連絡を頂きました。

卒業後五十七年、この間同窓会活動とはご縁もなかったこともあり逡巡しましたが、大先輩からのご指示でもあり、また小松中学校第四十六回卒業生の一人として、何かお役に立てることがあるかも知れないと思い、お引き受けすることになりました。同窓生の皆さん！とりわけ同期生の皆さん！応援をよろしくお願いします。

このようにしてお引き受けすることになった「天守台」の編集委員会が五月二十五日の夕方開催されるとのことで、小松高校記念館を訪ねました。正面右側の林の中にあるピンク色の建物が会場であるとのことで、旧校舎正面玄関の辺りを移築、整備された記念館を見つけ、かって生徒がむやみに出入りできなかった昔を思い出しながら、恐る恐るドアを開けたものです。

夕方の物静かな、人気のない廊下を左に曲がり、階段教室を過ぎたところにある階段を上り、踊り場の所まで来た時、そこに掲げられている薄汚れた「小松中学校応援団」幟と、「小松中学」幟に私の目は釘づけになりました。長い間記憶の底に埋もれていた中学生の頃の部活動の思い出が突然蘇りました。

当時、私が属していた陸上競技部の一行が、金沢市などで開催される競技大会に参加するため小松駅を出発するとき、駅前広場での壮行会で、応援団の皆さんが応援旗を打ち振って、応援歌「門出の歌」を歌い、激励してくれました。

「頑張るぞ！」気持ちの昂ぶるのを覚えたものでした。

昭和二十年八月十五日の終戦の後、それまで夜勤までして励んでいた小松製作所での勤労動員から解放され、一時の虚脱状態からどうにか落ち着きを取り戻し、学校生活が軌道に乗り始めた頃から部活動が復活しました。私は陸上競技の長距離を勧められ、同じ種目を選んだ本谷勇君とともに、練習のために暇さえあれば梯川の堤防や小松の街中を走ったものでした。二人は良きパートナーであり、またライバルでもありました。当時のことを、パンツひとつにランニングシャツ、鉢巻姿の二人を町の人々はどうゆう目で見ていたのでしょうか。

戦後いち早く、戦前からの伝統を受け継いで復活した小松中学の運動部の活動は、県内有数の名門校としてその名を知られるようになりました。陸上競技部も力があり、能登の羽咋中学と競り合ったものでした。

小松駅頭の壮行会で、応援団から贈られたあの「門出の歌」が、今も耳に残っております。

（小松市）

上が当時の応援団の皆さん。
下が昭和22年、私が4年生の時のものです。
天守台で撮った優勝記念のものです。
私は写真左端です。

平成17年度小松同窓会会計予算決算書

●収入の部

（単位：円）

科目	17年度予算額	16年度決算額	摘要
入会金	3,090,000	3,210,000	平成17年3月卒業生10,000×309名
繰越金	1,198,832	980,261	前年度会計より
諸収入	131,168	381,154	預金利息、樹木管理費
計	4,420,000	4,571,415	

●支出の部

（単位：円）

科目	17年度予算額	16年度決算額	摘要
総会費	250,000	50,400	総会、新年会関係経費
卒業記念品	250,000	214,200	卒業生記念品代
名簿作成費	200,000	104,000	新理事通信費等
通信事務費	250,000	187,999	切手・ハガキ代
渉外費	400,000	212,105	事務局経費（電話代等）、広告代等
パソコン管理費	1,300,000	1,153,250	パソコン消耗品、職員賃金、手当
会報事業費	600,000	589,805	会報印刷代、郵送料、編集費等
記念館事業費	150,000	120,542	記念館展示等諸経費
会合行事費	350,000	274,385	支部総会役員派遣費等
一般事業費	400,000	368,747	記念館管理費、ホームスクールカミングデイ経費
雑費	100,000	97,150	慶弔費
予備費	170,000	0	
次年度繰越金		1,198,832	
計	4,420,000	4,571,415	

「最後端」

武腰　潤（高校18回）

今では考えられないことですが、高3の昭和40年12月の夜、父親と担任ではない或る先生が酒を飲んでいるところへ呼び出され、懇々と説教されました。そのときが私の人生を決定付けた日と思います。

それは、部活のバスケットボールだった私を、代々家系が九谷焼の絵付師であり、長男ということで、金大の教育から金沢美大への進路変更を口説かれた日でした。自分には全く不似合いだなぁと思いながらの受験でしたが、担任の先生の許可を得て午後の授業を休講しての二ヶ月間、木炭デッサン塾、水彩画塾の猛特訓が効いたのか、なんと合格してしまいました。

以来、美術絵画から九谷焼と40年、携わってきました。業として30年です。最近漸くモノづくりが分かってきたような気がして「心の籠ったモノが出来た。」と云ってしまうことがあります。しかしながら、よく考えて見ますと、モノの作り方が分かったのではありませんでした。

「いいモノは精神性が高まらないと作れない」ということが分かったということです。つまり、高める術が分かった訳ではありません。自分の目線で、たまたま良い出来のモノを観たとき、「心が籠ったなぁ。」と思っただけのことです。30年間、大概は駄作を作り続けているのだと思います。まあ、これを40年の積み重ねとか修練とかいうのかも知れませんが…。

今日もまた、粘土に触っています。「この壷のこの口づくり、こう拈ってこんな味を…。」と思ってしまいます。作り手なら至極当然のことながら、これでは駄作作りに邁進してしまっているような気がします。

これまで、人の技より一歩先、一歩新しいもの、一歩力強いもの、一歩綺麗なもの、一歩…。周りの人ばかり気にしながら一歩、二歩、三歩先を歩みたく駄作を作り続けております。

人類、百歩先、千歩先を作り続けております。それを最先端というなら、ほんものは最後端にあるような気がします。

なぜなら、おそらく現代人より古代人の方が精神性が高いと私が思うからです。もっとも、私にとっての古代人とは古九谷を作った人のことです。

今、世の中、犯罪だらけです。最低限、携帯電話というモノが駄作になってほしいものです。（能美市）

恩師は有難き哉

柿原　秀嶺（中学37回）

「天守台」第二十九号で、私の三年先輩の城田賢一さんが、今は七十年近い昔となった旧制小松中学時代の先生方のニックネームを列挙して、そのエピソードを懐かしんでおられたが同感々々。この中で、特にお二人の先生について、私には今でも忘れられない思い出があります。

その一。ポッチャンこと国語の勝山先生。

何が切っ掛けであったか或る授業で、共産主義についての鋭い指摘を鮮明に思い出します。「君らよく覚えておけよ。共産主義はな、人間がすべて神様にならなきゃあ実現せんよ！」と。

信仰と思想の自由は勿論だし、官政財界の癒着に目を光らせるためにも、社民、共産両党の議席数が今の倍くらいあっても良いのではとさえ思いますが、世界の歴史を見渡して、共産主義政治は、旧ソ連をはじめ殆どすべて失敗。ベルリンの壁を命がけで乗り越えて脱出したのは、すべて共産側から自由側へのそれであった。北朝鮮も亦然り。日本では、昭和のはじめこの逆をいったのが、有名な女優岡田嘉子と杉本良吉の樺太の国境越えのソ連入国でしたが、その後の二人は天国であった筈のソ連で、予想もしなかった辛酸を舐めたという。ソ連を解体したゴルバチョフはその功でノーベル平和賞を受賞。

その二。孔子様こと漢文の篠塚先生。

二松学舎出身で漢文には詳しかった。

或る授業で、平家物語の敦盛の話が出て、或る生徒が「われこそは前の中納言維盛が三男、無冠の太夫（ダユウ）敦盛にて候」と読み上げたところ、先生は「君たち、よく憶えておくがよい、ダユウという呼び方は芸人か、悪くすると遊郭の女の呼び方だ。律令制度の宮中の位階官職の場合は同じ字でもタイフと発音するのだ。これを間違うと、それだけで君らの素養が見透かされるんだぞ。」と。

私は邦楽の琵琶を聴くのが好きで、年に二十回近く琵琶の会に顔を出します。この敦盛と、討ち手の熊谷直実の物語は有名で、必ず三、四の出演題目となりますが、演者のうち二人か二人を除いて、大半の演者は「ダユウ」と発音しております。その度に、その出来映えはともかく、ちょっとガッカリしながら七十年昔の篠塚先生のご指摘を思い出しております。恩師は有難き哉！（武蔵野市）

平成16年度小松同窓会運営基金特別会計現在高

繰越金	収入額	支出額	年度末残高額	摘要
6,669,649円	2,454円	0円	6,672,103円	収入：預金利子2,454円

平成16年度小松同窓会基本財産特別会計積立額

北國銀行定期預金　15,000,000円　＋新生銀行債券貯蓄　10,000,000円　＝25,000,000円

平成16年度小松同窓会天守台編集委員会郵便振替受払額

受入額	払出額	差引残額	摘要
800,395円	301,765円	498,630円	会報「天守台」送料、郵便振替料、平成16年度受入35件

随筆2題

本山　陽子（高校12回）

アメリカの寄付のこと

緑濃くなる六月の終わりの月曜日、私の住んでいる地区のガーデンツアーが行われる。20前後の家の庭を見て回るのだ。学校の駐車場を借り、バンで送り迎えしてもらう。ランチは野鳥保護公園のハウスで用意してある。植物好きでない人も、豪華に手入れされた庭を見るのが大好きで、この機会を見逃さないように早くからカレンダーに書き込んでいる。前の日にはガーデンパーティがあって、ワインを楽しみながらオークションにお金を出す。集まったお金はオードボンソサエティ、特に環境保護と教育のプログラムに行くことになっている。ガーデンツアーは二人五〇ドル、ガーデンパーティは百ドルである。

この日のための準備は大変なものだ。みんなボランティアなのだが、庭を見せてもらう交渉をはじめ、バンの用意（これも自動車ディラーから借りたり、足りなければボランティアの車を使う）、運転手の手配、小冊子の配布や庭の説明する人を配置したり、勿論、三百人分のランチも用意しなければならない。

昨年のこの日、みんな賑やかにランチをし、午後の二番目を回っている頃、夫婦二人してボランティアで忙しく動き回っていた人の八歳の女の子が事故で危篤になった。なんでも兄がふりまわしていたものの先が飛んで、運悪く妹の目に刺さったという。ヘリコプターで病院に運ばれたのだが、一週間後命を落とし、臓器はすべてドナーとして差し出されたという。

この夫婦は私達テニスをするものは誰でもよく知っている人たちで、誰にでもにこやか、テニスも上手で、この人たちがいるとテニスも、冬にするプラットフォームテニスも盛り上がったものだ。私は何回かご主人のビルと組んだことがあるし、奥さんのキャロリンともよくテニスやプラットフォームテニスをした。事故の日から一週間、状態はどうかと、ことあるごとに話題にあがり泣いたものだ。お葬式にはたくさんの人が出席した。キャロリンが残された上の女の子と中の男の子を両脇に、泣きはらした顔で退場して行ったのが今も目に浮かぶ。下の子のスナップショットが入り口に立てかけてあって、私達はまた新たに泣いたものだ。

この子の追悼として、名前をとって「シャロン基金」がピッツバーグ子供基金の中に作られた。私も百ドルを送った。

一カ月後、テニスジュニアトーナメントでキャロリンに会った。私達はハグし合った。キャロリンは毎晩アルコールを飲まないではいられないのだと言った。酔いつぶれて眠るのだろう。

デビーと私は、キャロリンのテニス肘がよくなるように、筋トレのトレーナーのところに無理やり引っ張り出した。彼女の周りの友達も何くれとなく世話をやいていた。そうしたことが一段落した十一月半ば、キャロリンの親友のポーラが第一回シャロン追悼プラットフォームテニス大会を開いた。ランチを入れて四十ドルで、小規模ながらオークションやくじ引きもあって、みんな気前よくお金を出し、たくさんの寄付がシャロン基金に集まった。これから毎年この大会が開かれ、子供を亡くした親の心を思いやる。

今年のガーデンツアーには、彼らはボランティアをするのだろうか。私達はあの不幸な事故のことを新たにし、涙するだろう。

エイミーのアーミーのこと

マリールウの孫が白血病になった。サッカーが大好きで活発だったが、今は抗がん剤で痩せて青白くなってしまった。唯一の治療は骨髄移植だけだそうだ。ところが彼女の血液型はRHマイナスの、なんとかがどうのと、なかなか無いタイプだと言う。エイミーの家族の中にはいなかった。マリールウはとても心配していた。

ある日、白血病の子供たちのために血液登録をするというチラシがメールで回ってきた。新聞にもその記事が出た。主催者はマリールウの息子のマイクと奥さんのリサである。私たちはこぞって出かけた。会場の教会にはたくさんのボランティアが働いている。まず受付では「エイミーのアーミー」と書いた青いTシャツを売っている。子供の名前の「Amy」に「r」を入れて「Army」とした。エイミーの血液型を探すためには大きな「軍団」が必要なのだ。次のセクションには、名前と簡単な質問を書き込む用紙が置いてある。それを書き込むと、今度は一対一で問診が行われる。五〇人くらいもボランティアがいただろうか。マリールウとご主人のデイブも青いTシャツを着て問診をしていた。私たちは一緒に写真を撮った。ここまでが普通の人のボランティアで、これに先立って二時間の教育を受けている。最後に看護婦やテクニシャンが血液を採る。これもボランティアである。マイクとリサが人の間を回って、よく来てくれた、と挨拶に忙しい。十時から四時までで何人の人が来ただろうか。私たちが行ったときはどのテーブルも椅子も塞がっていた。

血液登録ドライブはその後一年にわたって四回、ピッツバーグ各地で行われた。合計三千四百七十人が登録した。そしてエイミーのアーミーの凄いところは、この運動が全国的に広まって、アメリカ各地で五十のドライブが行われ、六千人が血液登録をしたという。

もちろん、この血液登録でエイミーのタイプが見つかる可能性は薄い。何しろ、昔のあるヨーロッパの地区のユダヤ人しかこのタイプがいないのだ。後日、マリールウの話によると、全国の骨髄移植を待っている四万人の中から、二人のタイプが完全にマッチし、また二十三人がマッチするかもしれないという。

数カ月後、エイミーは少しいいみたいだと言う。でも、本当に治るのは骨髄移植しかないのだ。血液を検査するのに、保険はそのホンの一部しか払わないので、一つのテストで八十ドルくらいが親の負担になる。基金設立もされ、寄付もあるようだが、自分でドナーを増やす運動をするというのが、とてもアメリカ的で、日本人の目から見ると、ただただ感動的だ。

エイミーのアーミーのホームページもある。ここでは「ドナーになりましょう」と書いた青いブレスレットも売っている。

www.amysarmy.org
（米国・ピッツバーグ）

宮下喜代治
（中学36回）

（前置き）今年で満八十四歳になりました。昭和十九年春、内地への空襲前進基地を覆滅すべく広東より湘桂作戦に出動、同期戦友二名を失いました。年齢二十一、二歳。己は彼らの四倍の寿命を享受してしまったことになります。よい年をしてこんなことを原稿にして申し訳ない気持ちで一杯ですが、最近ようやく研究？した駄文です。よしなにお取り扱い願います。

「行く春や鳥啼き魚の目は泪」考

春光将に尽きんとする元禄二年弥生の末七日（陽暦五月十六日）払暁、隅田の川を遡り、奥州街道最初の宿駅千住で船を降りた芭蕉が、見送りの門人達に矢立の筆初めとしてものしたのが冒頭の一句である。

「行く春や」には、止まることなく刻々と去り行く惜春の情と、街道とは名のみ草生い蔦葎茂る途を目前に、苦難の前途三千里の旅に胸塞がる思いと、再会を期し難い漂泊の旅に出で立つ人の後姿が消えるまでもと佇み、見送ってくれる門人達との惜別の感慨を暗示させるものである。

「鳥啼き」は、緑深い木々の間に杜鵑であろうか、早くも夏の到来を告げて囀り交わす声は悲しげである。

「魚の目は泪」は、鳥と共に漂泊の宿命を負ったものの悲哀を、擬人的に惜春、惜別の情をイメージしたものであるが、「鳥啼き」の現実的に対して「魚の目は泪」は非現実的で夢幻的とはいえ、奇妙で何か機智的な寓意が潜められているかのように思われている。

或いは前夜の別離の小宴の酒肴の魚か、千住朝市の魚肆に並べられていた生魚の嘔目だとも、陶淵明の詩「帰田園居」五首（其の二）」

鱞鳥恋旧林　池魚思故淵

に発想を得て、鳥魚の対に惜別の情を擬人的に誇張したものであるとか、古楽府の「魚河を過ぎて泣く…」や、謡曲「合浦」、素龍の跋に見える鮫人（人魚）の珠の泪、更には虚子の釈迦入滅時鳥獣が集まって慟哭する涅槃図の連想ではないか等の説があるが、いずれも釈然としない。

芭蕉は盛唐の詩人、李白、杜甫を敬慕しており、奥の細道冒頭の名文とされる「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人なり」は、李白「春夜宴桃李園序」夫レ、天地者ハ万物之逆旅、光陰者ハ百代之過客ナリ」を援用したものであり、七月半ば平泉に到り、金鶏山の「高館」に登高して「偖も義臣すぐって此城にこもり、功名一時の叢となる。『国破れて山河在り、城春にして草青みたり』と、笠打ち敷きて時の移るまで泪を落とし侍りぬ」

夏草や兵どもが夢の跡

と、杜甫の五律「春望」の頭聯を援用しているが、「行く春や」の句も亦「春望」の頷聯

感ジテハ時ニ花モ濺キ涙ヲ
恨ミテ別レ鳥モ驚カス心ヲ

を発想のヒントにしたものではなかろうか。

「行く春や」に続き「鳥啼き」は、戦乱の後の荒廃した城都長安には、季節の到来と共に草木は鬱然と茂り、常ならば耳の快い鶯の囀りも、異境に妻子を残して独居を余儀なくされ、身の行く末も覚束ない杜甫の心境は、芭蕉の漂泊孤独の境遇と渾然と感応したが、人気もない大厦の半ば崩壊した籬のあたりに時節に拘わることもなく、繚乱と無心に咲き群れている艶麗な牡丹の花に涙の雨を濺ぐ杜甫に対し、芭蕉には旅立ちの早暁、名残惜しく眺めた上野谷中の桜の梢には既に一朶の花も無かったし、ここ千住宿の荒蕪赤土には花と名付くもの一輪も目に入らず、滂沱と流れる惜春惜別の涙は徒に地を濡らすのみであった。

「なみだ」と訓ずる字を準えば、汁・泣・涙・泪・涕・眾とある。「眾」は目から涙の垂れる様の象形で、涕の初文とある。涙は漢代以後に現れた字であり、泪は眾を縦にした字である。芭蕉は「眾」という字から直ちに「鰥」という字を思い起こした。古典「礼記・王制」には、老而無妻者、謂之矜。とあり「釈文」には、矜、又本作鰥とある。詩篇には「鰥ハ亡妻ニ贈リシ魚ニ涙ヲ重シ悼モノ儀礼アリ之ヲ示ス」とある。

花に涙を濺ぐ杜甫に対し、唯涙に暮れる孤老芭蕉は鰥である。「春望」頷聯第二句「感時花濺涙」に対して「魚の目は泪」と結んで初稿の

鮎の子の白魚送る別れかな

を、

行く春や鳥啼き魚の目は泪

と差し替えることにより、巻末の

蛤のふたみに別れ行く秋ぞ

と、照応は完璧となった。

四年有余推敲に推敲を重ね、添削に添削を加え、虚構織り交ぜて、大紀行俳文「奥の細道」の成稿は、能書家の門人素竜の清書に委ねられたのである。

（米子市）

第5回 ホームスクールカミングデイのお知らせ

□とき　9月25日（日）
□ところ　小松高校記念館階段教室
天守台（懇親会）

高校16回生と36回生が中心です。
32回生が当番年度でお世話を致します。

創立記念特別展は校庭工事のため
来春に延期されました。

同窓会事務局にE-mailアドレス開設！

記念館の同窓会事務局にE-mail専用のパソコンが配置されました。アドレスは「matsukou@tvk.ne.jp」です。
同窓会への諸連絡にご活用下さい。また、同窓生の近況などもお知らせいただければありがたいです。ホームページ（http://tensyudai.client.jp/）の方もよろしくお願いします。

過去5年間の合格状況

国立大学	2001	2002	2003	2004	2005
北海道大	9	6	4	6	5
東北大	4	1	2	6	8
筑波大	3	4	6	6	8
千葉大	4	2	5	6	1
東京大	2	2	2	2	4
東京外大	0	1	2	0	2
東京工大	2	0	2	2	0
お茶水大	1	1	1	3	0
一橋大	0	0	0	0	1
横浜国大	2	3	4	2	0
新潟大	11	10	3	7	3
富山大	23	21	19	17	12
富山医薬大	2	0	0	5	2
金沢大	53	47	64	54	53
福井大	6	6	8	5	7
福井医科大	3	4	2	停止	停止
信州大	4	4	1	6	4
静岡大	5	5	8	4	6
名古屋大	8	8	5	6	4
名古屋工大	5	2	3	2	2
滋賀大	0	0	0	0	4
京都大	3	5	7	3	9
大阪大	7	4	9	12	11
大阪外大	0	4	2	2	0
神戸大	6	6	7	14	4
広島大	1	0	3	1	2
その他	36	36	33	28	24
国立大合計	200	182	202	199	176

公立大学	2001	2002	2003	2004	2005
首都大東京(旧東京都立大)	0	3	3	3	1
横浜市大	1	0	1	1	0
金沢美工大	2	1	0	3	0
京都府大	0	1	1	0	1
大阪市大	2	0	2	0	0
大阪府大	0	2	0	4	5
神戸市外大	0	0	0	1	1
その他	16	15	15	25	14
公立大合計	21	22	22	37	22
私立大学	2001	2002	2003	2004	2005
早稲田大	9	18	13	10	19
慶応大	5	12	8	5	13
明治大	13	10	8	14	5
立教大	5	7	1	1	5
法政大	12	14	15	9	5
中央大	10	9	17	9	21
日本大	15	18	19	13	13
青山学院大	10	9	9	4	10
東京理科大	12	21	17	12	7
専修大	2	4	6	4	4
上智大	6	3	6	2	2
同志社大	16	24	24	26	25
立命館大	65	66	71	88	63
関西学院大	12	17	12	15	31
関西大	30	30	19	33	30
京都産業大	14	12	29	15	21
その他	252	207	297	256	206
私立大合計	488	481	571	516	480

平成17年3月 卒業生の主な進学先

国公立大学	
北海道大	4
東北大	8
筑波大	6
一橋大	1
東京大	2
新潟大	2
富山大	10
金沢大	47
福井大	6
信州大	3
静岡大	5
名古屋大	4
滋賀大	3
京都大	8
大阪大	9
神戸大	4
奈良女子大	1
広島大	2
石川県立大	2
京都府立大	1

私立大学	
早稲田大	4
慶応大	5
青山学院大	4
中央大	1
法政大	2
東京理大	4
立命大	6
同志社大	6
関西大	2
関学大	4

今春の進路状況

平成17年度入試は、全国的にはセンター試験受験者や、国公立大学志望者の数が二年連続減少したこともあり、少数激戦の競争であったと思います。国公立大学の志願倍率は、5.0倍とセンター試験導入後最低の倍率を記録しました。受験人口の減少に加えて、ほとんどの大学でセンター試験五教科七科目を課すようになったことが、原因として考えられます。

その中で本校生徒は、二九九名の生徒がセンター試験を志願し（志願率96.8％）、粘り強く受験勉強に取り組みました。その結果、別記の表に示されるように、東大・京大・阪大などの難関大学で多くの合格者を出すことが出来ました。これも一年時から志望を高く掲げ、その目標に向かって日々努力してきた成果が表れたのだと思います。国公立大学の進学実現率も55％を超え、全般的によく健闘したと思います。

現三年生も、総体・総文が終われば、本格的な受験勉強に入っていくことになります。彼らも、先輩たちが教室に暗くなるまで残り、机に向かっている姿を目に焼き付けています。きっと先輩に負けじと、自分の目標達成のため最後まで粘り抜いてくれるものと信じております。

進路指導課

編集部だより

★暑中お見舞い申し上げます。同窓会報「天守台」も三〇号目を発行することができました。年二回の発行ですので、足掛け十五年です。これも、ご協力いただきました皆様のお蔭です。深く感謝致しますと共に、今後もどうぞよろしくご指導下さい。

★三〇号を迎えるにあたり、創刊から編集委員としてご尽力下さいました安田進一郎さんが勇退され、新たに中学四六回の黒本儀治さんに加わっていただきました。安田先生、長い間ご苦労さまでした。

★毎号、定期購読頂いている方に前号のお届けが私どもの手違いで、大変遅れてしまったことを深くお詫び申し上げます。今後は十分注意いたします。

「天守台」編集委員会

委員長　宮西勉夫（高校9回）
委員　黒本儀治（中学46回）
浜野光代（県女35回）
野田洋子（高校12回）
杉永信幸（高校18回）
池田幸夫（高校32回）
山口和博（高校34回）
同窓会事務局
村井恭子（高校34回）
学校職員　酒井隆志（高校32回）
岡野清